

お忙しくても、約 2 分間で読めます

# ハートフル・ワード (心からの言葉)

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

## 経営者への活きた言葉

「誰かの役に立つ」という心理的な配当を得る

ムハマド・ユヌス (グラミン銀行総裁・2006 年ノーベル平和賞を受賞)

1. 私たちの社会は、すべての人々を画一的な狭いシステムに押し込めるような形で発展してきました。資本主義の理論は私たち人間に、ロボットになるよう要求しているのです。この理論におけるビジネスの型は1つしか存在しません。つまりお金を生み出すためのビジネスです。私たちはそのただ1つの理論に適合するよう努力をし、利潤の最大化こそが最大の使命であると認識しています。こうした歪められた人間像は、資本主義の理論によって生み出されているのです。しかし、人間は多元的な存在であり、利己的である半面、利他的、つまり「無私」であるという側面も備えています。
2. 私がいま皆さんに申し上げたいのは、人間の利他的な側面をとらえた「ソーシャル・ビジネス (社会問題に取り組むビジネス)」というビジネス形態を創造しようじゃないか、ということなのです。ソーシャル・ビジネスは他者の利益を目的とし、いままでの利潤追求のシステムの対極に位置するものです。失業者の雇用、ホームレスの人々の救済、…、ソーシャル・ビジネスは営利目的でもボランティアでもありません。事業に投資したコストをちゃんと取り戻せるような方法で運営するため、持続的な取り組みができるのです。こうした新たなビジネス形態を成立させるためには、多大な創造的エネルギーを投入する必要があります。
3. 会社の中にいると、限られた枠組みの中でしか物事を思考することができなくなるのです。何か行動を起こしたいと望んでも、現在のシステムにおいては何もすることができない。基金に寄付したり、献金をするくらいしか選択肢がないと考えているのでしょうか。私が取り組んでいるのは、この閉ざされたドアを開け放つということです。「利潤を生み出さなくてもできるビジネスがある。出資者はそれによって、誰かの役に立つ、という心理的な配当を得ることができる」。この全く新しい考え方を理解してもらうのは、容易なことではないが、必ず共鳴してくれるはずだと信じています。

(参考:「致知」2009年11月号)

## 幹部・管理者への活きた言葉

40 代中間管理職の生き方・考え方

佐々木 常夫 (東レ経営研究所所長)

1. 仮に同じ会社で定年まで働くとして、年代別に働くマインドをどう考えればいいのか。基本的には 20 代、30 代は自己主張しつつマイペースで働いたらよいと思う。しかし、40 代になった慎重に行動しなければならない。周囲の人の考え方、会社の企業文化、自分の上司や部下のありようを冷静に把握しながら突出した行動は避けたほうがいい。40 代というのは中間管理職であるが、ここを上手に突破しなくてはマネジメント層にはなりえない。
2. 40 代の人間は賢く周りを見なくてはならない。慎重に行動しなくてはならない。自己啓発をし、人脈ネットワーク作りに励まねばならない。そして厄年ともいえるこの時期をしのご切って 50 代になり、高い地位を得て初めて自分の目指すマネジメントが実践できるのだ。そこで人生、最後の勝負のときを迎えるのである。

(参考:「週刊東洋経済」:2009年8月29日号)

## ワンポイント経営アドバイス

技術、製品、産業の変化を予期できる

(P.F.ドラッカー)

1. あらゆる企業が技術のダイナミクスを理解し、その変化の方向と速度を知らなければならない。新しい技術が既存の経済活動の外にいる個人としての発明家によるものにとどまらないのであれば、そのような理解も必要ない。だが、これからの経済がイノベーションと変革の時代に入るのであれば、既存の組織に働く者が、技術の変化を予期し、そこからもたらされる機会を利用することができなければならない。いかなる技術の変化が、いつ頃起こりそうかを知る必要がある。
2. ヘンリー・フォードはなにも発明しなかったが、大量生産、大衆市場、大量販売というビジョンを持っていた。データ処理について、IBMの創立者トーマス・ワトソン・シニアが、それが何であるかも知らずに、コンピューターが普及する 40 年前から口走っていた。我々は、技術のダイナミクスを理解することによって、技術、製品、産業の変化を予期することができる。

(参考:「週刊ダイヤモンド」2009年7月25日号)

## 古典に学ぶ

人生の真の出発

「私は、人生の真の出発は、志を立てることによって始まると考えるものです。古来、真の学問は、立志をもってその根本をなすと言われているのも、まったくこの故でしょう。人間はいかに生きるべき、この二度とない人生を、いかに生きるかという根本目標を打ち立てることによって、初めて私達の真の人生は始まると思うのです」

(参考:森信三「修身教授録妙」:致知出版社)